



カントボーイの
エリート教師が
淫らに
調教される話

午後の日差しが窓から差し込み、眠気を誘ってくる。

ルシアンは眠気覚ましの甘いミルクコーヒーを飲み、デスクに広げた答案用紙の採点を再開した。

こればかりは魔法でこなすと、生徒一人ひとりの実力を把握できないので時間をかけてするしかない。

二十一歳になったばかりのルシアンは、今年からアカデミーで教師として働き出した。

新人でありながら、純度の高い魔力持ちで、雑務も完璧に業務をこなす。さらには作業を効率化できる魔法まで考案し、教師たちの残業も大幅に減らすことができたため、一部の同僚たちからは崇められているほどだった。

たまには肩の力を抜いたらどうかと言われることもあるが、ルシア

ンが仕事にのめり込むのには、理由があった。

ルシアンは人とは違う秘密を抱えている。それは男性でありながら、性器は女性というカントボーイと呼ばれている体質だ。

就職の際、体質については職場に申告をするという決まり事がある。差別を受けることも多く、周囲にバレると好奇の目で見られてしまう。

理事長は、学生の頃からルシアンの体質を周囲に隠してくれていて、就職の際も保健医にのみ共有するという配慮をしてくれた。

そのおかげでルシアンの平穏な日常が守られている。

尊敬する理事長に少しでも恩返しをしたい。そして、自分の価値を仕事ぶりできちんと見せたいと強く思っていた。

ルシアンは赤ペンを走らせ、頷く。

……みんなよくできている。今回のテストの平均点は高そうだな。

「ルシアン、少しいいか？」

顔を上げると、同僚のレグルスが立っていた。彼はアカデミーの頃の同期で、偶然にも同時期に教師になった。

レグルスはいつもとどおりの無表情だが、どこか異様な雰囲気を纏っている。

……なんだ？

疑問に思いながら、ルシアンは赤ペンを置く。

「これについてなんだが」

彼の手には見覚えのある書類——先日提出した健康診断の書類が握られていた。

心臓が凍りつくような感覚がし、ルシアンは青ざめる。

まさか――。

「……部屋を移動しよう」

慌てて立ち上がると、ルシアンはレグルスを連れて職員室を出た。ひと気のない空き教室へ入り、引き攣った顔でレグルスの前に立つ。平静を要素っていたが、冷や汗をかいていた。

……どうするべきか。

いくつかの言い訳を頭の中に並べたものの、彼を言いくるめる方法が浮かばなかった。

「それで、これはどういうことだ？」

レグルスは書類を机の上に広げた。そこには医師の走り書きで、性別は男性だが、特殊体質――性器は女性と記されている。

「それは……見間違いは？」

「見間違いで済む内容じゃない。俺は医務室で偶然これを見つけたんだ」

ルシアンの手が震える。親しい友人には誰にも言えず、長年隠し続けてきた秘密だ。

「レグルス、これは……」

「説明しろ」

ルシアンは唇を噛み締めた。どう言い訳しても、この書類の前では意味がない。

「……書いてあるとおりだよ」

小さく呟く。認めたくないけれど、この状況で隠し通すことはできないとルシアンは諦めた。

「つまりお前は、性器だけ女なのか？」

「……そうだよ」

その時、部屋の隅からガタツと音がした。

「聞いちゃった」

いたずらっぽい声が響く。

窓辺のカーテンが揺れ、現れたのは生徒のアダルバードだった。

「アダルバード……！　なぜそこに！」

「サボってたんだよ。ここ、いつもは誰も来ないからさ。でも、面白い話が聞けちゃったな」

アダルバードの口元が緩む。獲物を見つけた肉食獣のような笑みだった。

ルシアンは一気に血の気が引いた。

……もつとちゃんと部屋の中を確認するべきだった。

アダルバードはルシアンに近づくと、肩に手を置いた。

「ね、ルシアン先生。本当にちんこついてないんですか？」

「……！」

卑猥な言葉にルシアンが後ずさる。しかし、逃すまいとアダルバードの手はルシアンの肩をしっかりと掴んでいた。

「稀にそういう人がいるって話は聞いたことあるけどさー。ね、レグルス先生は実際そういう人と会ったことがあります？」

「俺も聞いたことはあるが、出会ったことはなかったな」

ふたりが視線を合わせて頷いたのを見て、ルシアンは言葉にならない妙な恐怖感を覚える。

「この書類が正しいのか、身体検査が必要なんじゃないですか？」

「そうだな」

「え……？」

アダルバードとレグルスの言葉にルシアンは耳を疑う。レグルスの鋭い目は、ルシアンを逃がすつもりがないことを物語っていた。

「さ、ルシアン先生。身体検査を始めよっかー」

「そんな……やめ……っ！」

抵抗するルシアンの腕を、ふたりが掴む。ルシアンの細い腕は、簡単に押さえつけられた。

「暴れないでよ、ルシアン先生」

アダルバードの手が、ルシアンのシャツのボタンに触れる。ひとつ、またひとつと丁寧に外されていった。

白い肌、細い肩、華奢な鎖骨。そして——淡い桃色の乳首。

「やだ……離して……っ」

ルシアンの声が震える。

「胸は男っぽいけど……でも乳首は綺麗だねー」

アダルバードは、指でルシアンの胸の先端に触れた。

「ひっ……!」

敏感な部分をいじられ、ルシアンの体が跳ねる。

「感じちゃって、かわいいー」

レグルスはルシアンのズボンと下着を脱がせた。下腹部に空気が触れてひやりとした。

「わー、本当だ! ペニスじゃなくて、クリがある」

アダルバードの視線が下に向いた。

そこにあるべき男性の象徴が存在しない。

「……事実だったのか」

レグルスの声に、かすかな驚きが混じっていた。

レグルスの指が、割れ目に触れる。そして指で開くと、指先でクリトリスに触れてきた。

「んっ♡」

ルシアンの中から、自分でも驚くような甘ったるい声が漏れた。

体が勝手に反応する。長年触れることすら禁じてきた部分だ。

誰にも見せてはならないと隠してきた場所を、今同僚に触られてい
るのだと考えるだけで、ルシアンは羞恥でどうにかなりそうだった。

「も、もう見たからいいだろ……っ！」

「もっとよく観察させろ」

指先でいじられると、体が震えて反応してしまう。

「んっ♡」

「本当に女性みたいに濡れるのかも見ないつつすよね。じゃあ、俺は乳首気持ちよくしてあげますからねー」

ぐりぐりと柔らかい舌でアダルトバードがルシ안의乳首を舐める。その刺激に、ルシアンは仰け反った。

「ああああ♡」

「……濡れてきたな」

レグルの指が、くちゅくちゅと音を立てる。愛液が彼の指を濡らしていく。

「あっ……ああ……♡」

ルシ안의腰が震えた。恥ずかしさ以上に、快感が脳を痺れさせ、目にはじんわりと涙が浮かぶ。

「感じやすいんですね、先生」

アダルバードがクスツと笑いながら耳元で囁く。その声だけで、またルシアンの体が熱くなった。

「やめて……お願い……こんなの……」

「気持ちいいんだろ？」

レグルスの指が、敏感な突起に触れる。

「ひあっ♡」

「ここが好きなのか？」

レグルスの指が小さな突起をいじる。円を描くように、優しく触れられてルシアンはびくりと体を震わせた。

「だめ……だめ……そんなっああ♡」

「イきそう？」

アダルバードが笑う。そして、ルシアンの胸の先端を摘まむ。

「ああん♡」

ふたつの敏感な部分を同時に攻められ、ルシアンは理性が崩れていく。

「いや……やだ……こんな……っ！」

「でも、体は正直だな」

レグルスの指がぐちゅっと音を立てる。愛液が溢れ、太ももを伝った。

「もう……なんか……っああ♡ 変……っ、ああ♡」

「イきそうなんだろ？ それならいくって言え」

やだやだと首を横に振るルシアンに、レグルスは「言わないならお仕置が必要になるぞ」と冷たく言い放つ。

ここで刃向かえば、なにをされるかわからない。ルシアンは素直に

快樂に従うように口を開いた。

「……っ、いく……イっちゃうからッ♡」

「イけ」

レグルスの命令に、ルシアンの体に従う。

「あっ♡ あ♡ あう♡ ああああああああ♡」

体が弓なりに反り、視界が白く染まる。長年抑え込んできた快感が、一気に解放される。

達した直後、アダルバードがその濡れた場所に顔を近づけた。

「な、なにを……!」

「んー? 舐めてみたくなって」

「だ、だめ♡ ああん♡」

アダルバードの舌が、敏感になった割れ目をねぶる。そして、中を

指で弄ばれる。

「あっ♡ あっ♡ そんな……やだっ♡」

抵抗しながらも、ルシアンの腰は自然と動く。快感から逃れられない。

「こっちもいじってやる」

レグルスが乳首を指で弾く。

「ひゃあ♡」

「乳首も、もうこんなに硬くしてるんだな。お前がこんな変態だったとは」

「やだ……も、やめて……あああああ……っ」

「こんなに感じてるのにやめていいのか？」

レグルスの指が、乳首を摘まんで引っ張る。

「ああん♡　だめっだめ……だめだつてばあああ♡」

「先生、またイきそう？」

アダルバードの舌が、クリトリスを激しくねぶる。

「あ♡♡　あ♡♡　イク……イク♡♡」

二度目の絶頂に体が震え、ルシアンの視界が歪む。

「はあはあ……」

息を整える間もなく、アダルバードが立ち上がった。その手が、自分のズボンのベルトを外す。

「先生……俺、もう我慢できない」

「ま、待って……！」

「先生の中に入りたい」

逃げようとするルシアンの腕をレグルスが捉えた。

「指導してやれ」

「……っ！」

「お前は教えるのが得意だろ？」

いじわるくレグルスが囁く。ルシアンは中がきゅうつと収縮するのを感じた。興奮してはいけないと頭ではわかっているのに、体は求めてしまう。

「教えて、先生の気持ちいいところ」

アダルバードのペニスは硬く勃起していた。それを見て、ルシアンは息をのむ。

「やめて……そんな……！」

「大丈夫、気持ちよくしてあげるから」

アダルバードが、ルシアンを机の上に座らせると、脚を開かせる。

その先端が、濡れた入り口に触れた。

「あっ♡」

「挿れるよ」

ずぷりと音を立てて、アダルバードのペニスがルシアンの中に入っていく。

「あああああっ♡」

「っ中、締めつけ、すごすぎ……!」

「やだ……やだっ……レグルスの前で……こんな……♡」

「本当に？ 見られて興奮してるんじゃないの？ 中すっごい、締まるけど」

レグルスはすぐ隣に立ち、じっとルシアンを見つめている。

「生徒のちんこで興奮してるのか」

「ち、ちがつ」

「お前が乱れる姿をじっくり見ていてやる」

「やつ……あああ♡」

アダルバードが腰を動かし始める。ぐちゅぐちゅと、淫らな水音が部屋に響く。

「あっ♡ あっ♡ ああん♡」

「はしたない声だな、ルシアン」

あの冷たい目が、乱れた姿を見つめているのだと思うと、ルシアンはぞくぞくしてしまふ。

「見ないで……お願いだから……あああ♡」

「先生、教えて？ どこがいい？ ここかな？ それとも……ここかなっ？」

ぐりツと奥を突かれる。

「ああああああ♡ あう♡ あああん♡」

中の刺激で軽くイってしまったルシアンはぐくぐくと足を震わせた。

「んっ♡ 中、痙攣してるよ。ここがいいんだ？ ほら、ちゃんと言葉にして教えてよ」

「や……ああ♡」

レグルスの手が、クリトリスに触れる。

「あっ！ そこ……だめ♡」

「中と外、両方攻められたらどうなる？」

「レグルス先生、それ……やばすぎ！」

アダルバードの腰の動きが速くなる。それに合わせてレグルスの指